

私の恩師から私の教え子へ

初めて担任した小3だった教え子が、高校生となり夢の甲子園に出場した。

それから数年後、偶然近くの病院に何度か通っていた時に、その子のお母さんから、彼が甲子園に出場した時のお土産を頂いた。「甲子園」と毛筆体で書かれた、えんじ色の紙袋に入った甲子園限定のキティちゃんのキーホルダーだった。

小3の時に担任し、その年私は別の学校へ異動した。キーホルダーをもらったときの彼の年齢は24くらい。「いつか先生に会えると思ったから。」

私が教員を目指したきっかけは、中2の時の担任の先生の影響である。反抗期、思春期真っ只中。絶対に弱いところは人には見せない。だから誰にも話さないし誰にも相談したくない。自分が部活や人間関係でうまくいかなくても、部活の先生や先輩方にも相手にされていなくても、私は絶対に部活は休まなかったし、むしろ毎日誰よりも早く部活に行き、誰とも口をきかずに自主練をし、練習が始まると与えられた内容を流れのままやって、毎日が終わる。中学校生活では、別の部活の友達と過ごしていた。そんな毎日。

ある日の放課後、担任の先生に呼ばれ、最近の学校生活で注意されたことがあった。

その時、特別私は何も言わなかったが「おまえ、部活でうまくいっていないんだろう。」そう言われたとき自分が我慢していたものが大きく音を立てて崩れていった。

自分が何も話さなくても、担任の先生は分かってくれていた。

何も言わなくても気付いてくれる先生がいるんだ。私もそんな先生になりたい。

大学時代、教員以外でも子どもに関わる仕事を考えていた。警察官や法務教官など。

講師の話が来て、講師として仕事をした。最初は全く分からないままの毎日だったが、子どもから「なるほど！」と教わることや、何気ない子どもの一言で、「頑張ろう！」と勇気づけられた。子ども目線で子どもと会話をしたり、遊んだりすると子どもの気持ちがよく分かる。全力で過ごした。子どもと一緒に活動することが楽しい。早く本採用になりたい。警察官ではなく、教員。私は教員として子どもと関わっていくと決めた。

遅咲きではあったが、教員採用試験に合格した。

子どもと全力で過ごす。子ども目線で。そして、子どもが言わなくても子どもの思いに気付ける教員。子どもに夢をもたせたい。見る夢ではなく、叶える夢を。

甲子園球児となった教え子であるが、小3の時はヒーローでもなく、リーダー格でもない。だから体育でも自分から先に行動することはなかった。どちらかというとなんかをするにも「○○！」と同級生や先生に言われていたような子どもだった。

彼とは放課後や休み時間などいろんな話をした。「○○は、運動のセンスがいいから、中学校に行っても運動部に入った方がいいよ。」そう、話したことがあった。その言葉がとても心に残っていたそうだった。

小3の頃に出会い、何気ない会話の一言が彼の人生を大きく動かしていた。

それが高3で憧れの甲子園球児、そして今は航空自衛隊で働いている。

偶然の出会い、何気ない一言が、言霊となり、その子どもの人生につながっている。

私の中2の時の担任との出会い、そして私が小3の子どもを担任した出会いが全てつながっている。そう感じた。